

# 4番目の許婚候補4

## 目次

それぞれの夜	side 上条沙耶子&隆俊	273
それぞれの夜	side 田中雅史&川西貴美子	249
4番目の許婚候補	4	5

4  
番目の許婚候補  
4

## 第1話 夢オチ希望の朝

一人暮らし第一日目の朝。私、上条まなみはメールの着信音に起こされた。横になったまま、ぼうつとした頭でベッドのサイドテーブルの上を手探りする。そして携帯電話を掴んで確認すると、届いていたのは従姉の真綾ちゃん——瀬尾真綾からのメールだった。

『おはよう、まなみちゃん。引つ越しご苦労様。もう荷物の整理は終わった？ 一人暮らしは大変だけど、親元を離れて初めて分かることも色々あるから、きつと独立してよかったと思うはずよ』

『引つ越し』『一人暮らし』——その二つの単語で、私は一気に覚醒する。

そうだ私、昨日から一人暮らしを始めたんだ……！

ガバツと起き上がると、目に入ったのは実家の部屋ではなくて、昨日荷物を搬入したばかりの新しい部屋だった。白い壁に囲まれた新居をぐるりと見回したあと、私は手の中の携帯に視線を落とす。真綾ちゃんのメールにはまだ続きがあった。

『落ち着いたら、またみなでお茶でも飲みに行きましょう。まなみちゃんの新居は佐伯家の物件だから、私たちは見に行けないけど、どんな部屋に住んでいるのか知りたいから、その時は話を聞かせてね』

真綾ちゃんの優しさが溢れる文面に、胸が温かくなった。

私だって本当は真綾ちゃんはじめ、真綾ちゃんの妹の真央ちゃんや、同じ従姉の三条舞ちゃんにもこの新しい部屋を見て来て欲しかったんだけど——

このマンションは大企業を経営する佐伯家所有の物件で、私にここを紹介してくれたのは、その佐伯家の御曹司なのだ。

実はその佐伯家と、私の母方の親族である三条家との間に縁談が持ち上がっていて、それに私を含めた従姉妹の四人が大きく関わっている。

なんと五年以上も前に亡くなった私たちの祖母の三条真子と、その友人である佐伯美代子さんが、お互いの孫を結婚させる約束を交わしたのだという。

けれど、大会社を持つ三条家の令嬢である舞ちゃん、それに瀬尾コーポレーションという大会社の社長令嬢である真綾ちゃんと真央ちゃんを差し置いて、庶民の私が選ばれるわけがない。だから私は四番目の候補で、縁談にはほとんど関係がないと思っていた。

……けれど、神様は私に妙な運命を用意してくれたらしい。コネを嫌い、自分の力で就職した会社で佐伯グループの傘下で、配属先の部署にはその佐伯の御曹司がいたのだ。

それが仁科彰人課長。名字が違っているのは、会社では佐伯の御曹司であることを隠して働いているから。佐伯の名に頼らず、自分の実力を試すため、あえて母方の姓を名乗っているらしい。武者修行といったところだろうか。

実際、とても優秀な人で、私が入社した時は主任だったのに、あつという間に課長にまで昇りつめてしまった。

私はそんな彼を尊敬していた……いや、現在進行形で尊敬している。けれど、最初はなるべく関わらないようにしていた。なぜなら私自身、三条家の外孫であることを会社では隠しているから。それに私が四番目の許婚候補であると、課長に知られるわけにもいかない。

せめて、この縁談が白紙に戻るまでは、絶対に秘密にしなければ。

そんな私の気持ちを知る真綾ちゃんたちは、遠慮して私の部屋に來ない。自分たちが佐伯家所有のマンションに出入りすることで、私の秘密がバレてしまう可能性があるからと言って。

最初は考えすぎだと言っていただけ、今は彼女たちにとっても感謝している。

私はハアと深いため息をついた。

「……どうして、こんなことになってしまったのやら」

仁科課長は上司としても人間としても尊敬できる人で、佐伯の御曹司であるということを考えなければ、傍にいたのはとても心地がよかった。それでつい油断していたというか……警戒モードが全く機能しなくなっていたわけですよ。

私が過保護な従兄弟たちから一人暮らしの許可をようやくもぎ取って、いざ部屋を借りようとし

た時に、仁科課長が良い物件を紹介してくれたのだ。賃料はお手頃、会社からもまあまあ近く、求めている条件が全て揃っていた。

ええ、もちろん飛びつきましたよ。それが何か？

……その物件が佐伯家所有のマンションだと知ったのは、賃貸契約を結んだあとのことだった。

それでも私は透兄さん——過保護な従兄弟のうちの一人である三条透の反対を押し切り、その物件に住むことにした。

あああああ、あの時の自分を蹴っ飛ばしてやりたい！

油断するなど忠告されていたのに、私はそれを全く意に介さず、自ら相手の囲いの中に飛び込んでしまったわけだから。

私はもう一度深いため息をついてから、真綾ちゃんにメールを返信した。

ベッドサイドの目覚まし時計で時刻を確認してみると、朝の十時過ぎ。今日は日曜日だからよかつたものの、もし平日だったら遅刻確定だ。

……これも昨夜、なかなか寝付けなかったせい。

これは夢だと自分に言い聞かせて目を閉じたけど、何かに追いたてられるような圧力を感じて寝られなかったのだ。結局、明け方近くまで起きていた。

本当なら早起きして、近所の散策かたがた朝ごはんを食べられる店を探す予定だったのに。

それもこれも、全ては仁科課長のせいだ。あああ、夢だと思いたい、全部！

「本当に、どうしてこうなったんだか！」

私の脳裏に、昨夜の出来事が蘇った——

\* \* \*

「ようこそ、まなみ。俺の腕の中へ——。これから、色々とよろしく、ね？」

そう言って、妖艶な黒い笑みを浮かべる課長を見て、私はいまだかつてないほど混乱していた。

——これは一体誰？

その疑問だけが、頭の中をぐるぐる巡っていた。

廊下に座り込む私の前に、トレードマークの眼鏡を外した課長がしゃがみ込んでいる。いつもの課長とは、全くの別人に見えた。思わず頭の片隅に『実は双子だったの？ それとも二重人格？』なんてドラマのような設定が浮かんだくらいだ。

「……あなた誰ですか……？」

つい、そう口にしていた。

その時私は、目の前の人が課長じゃないことを期待していたんだと思う。けれど、笑顔と共にとんでもない答えが返ってきた。

「もちろん、君の上司だよ。——そして、君の恋人になる男でもある」

「……これ！」

直前に激しくキスされてじんじんと疼く唇から、思わず素っ頓狂な声が出た。

「い、こ、こっ……！！」

——もちろん「恋人!？」と言うつもりだった。だけど人間、あまりにびっくりすると、まともに声が出なくなるものらしい。「こ」の先の言葉が、どうしても出てこなかった。

「いっ、こっ、こっ」

ニワトリ化して混乱する私を見る課長の目は、明らかに愉悦を含んでいた。どうも私の混乱ぶりを楽しんでいるようだ。

それを認識したと同時に、すっかり解けてしまっていた警戒モードがいきなり全開になった。

——危険。この人、危険だ！

ガンガンガンと、本能が今さら警告音を発する。

——この人から、透兄さんや涼と同じニオイを感じる。その意味するところは……

ちなみに涼というのは真綾ちゃんと真央ちゃんの弟で、透兄さん同様に過保護な私の従弟だ。

警戒モード発令と同時に思考力を取り戻しつつある頭で、私は先ほどの課長の言動を一生懸命思い出していた。もちろん、キ、キスとか、そういうシーンは除いてだ。

『俺のものになりなさい』

『君に拒否権は与えないよ？』

『この礼はきっちりしてもらおうからね』

『ようこそ、まなみ。俺の腕の中へ——』

これらの言葉に加え、こっちの混乱に乗じてキス（しかも、し、舌を入れてきた！）をするとうう、私の弱いところを確実に強引に突いてくるやり方。さらには、このマンションへの引越しを誘導した巧みな手口。私はそこで、ようやく気付いた。

——ああ、分かった。この人、いわゆる腹黒だ。涼と同じくらい……ううん、もしかしたらそれ以上の。

巨大な猫を被ってる、お腹真っ黒な人だよ！

遅きに失した感はあるけど、私には分かる。伊達に、あんな腹黒な従兄弟を二人も持っているわけじゃないんだから。

「さ、詐欺だ——！」

私は思わず叫んでいた。

「こんな、いきなり豹変するだなんて……騙された！」

良い人の仮面の裏にある本性に、全然気付かなかったよ、コンチクチョー！

けれど、目の前の人は笑みを浮かべたまま言った。

「騙すだなんて、人聞きの悪いことを言わないでくれ。会社では多少大人しくしているだけだ。それも人間関係を円滑にするための方便だよ」

「だとしても、変わりすぎです！」

あの人当たりのいい課長はどこ行っちゃったの？ あっちの方が断然よかった！ あれが本性な

ら、もつとよかった！

腹黒は身近に三人もいらぬ。本当にいらぬ。

「できれば一生騙されたままでいたかったです！ 何で本性バラしちゃうんですか？ しかも私なんかに！」

私がそう叫んだ直後、課長が笑みを深めた。——ついでに黒さも増してるんですけど？

「キスされたことは、スルーするつもりなのかな？」

妙に優しい口調で言われて、私はビクツとした。

ヤバイ。何か地雷を踏んだらしい。頭の中で警告音が大きくなり、本能がさらなる危険を知らせてくる。

私は思わず目を逸らそうとしたけれど、すばやく顎を捉えられ、顔を固定された。

「ねえ、まなみ。俺はもう、逃げるのを許す気はないんだ」

課長は笑みを浮かべたまま、蠱惑的に囁く。それがどうして、こんなに恐ろしいのだろう。

「君は俺に騙されたと言って怒ることで、肝心なことから目を逸らそうとしているようだが、そうはいかないよ？ 今君が考えるべきなのはそんなことじゃない。別のことだ」

「……別の、こと？」

「君が好きだと言っただろう？ そのことだ。今までさんざんスルーされてきたが、もう君が目を逸らすことも、論点をずらすこともできないくらい、はつきり言わせてもらおう」

そう言っ、課長は顔をぐっと近づけてきた。吐息がかかるくらいの至近距離まで迫られて、私

息を呑み——ついでに悲鳴も呑み込んだ。

……ち、近すぎる！

私のすぐ目の前で、形の良い薄い唇が弧を描いていた。だけど、それはいつもの優しい笑みではない。捕まえた獲物をどうやって食べてやるうかと思っている肉食獣の笑みだった。

「君が好きだ」

吐息交じりに囁かれた声にはすごく色気があって、私の腰とお腹にズシンと響いた。キスで力が抜けていた身体から、さらに力が抜けた。

「君を愛している。その目をずっと俺に向けていて欲しいし、ずっと隣にいてもらいたい。君を抱きしめたいし、キスもしたい。顔中、身体中、俺のキスで埋め尽くしたい——」

その言葉を聞いた時、ぞくりと何かが背筋を走った。悪寒に似ているけど、悪寒じゃない何かが「それだけじゃない。この服を剥ぎ取って柔らかな肌をじかに感じたいし、俺に触れられて感じる顔を見たい。君の身体を開いて一つになりたいし、絶頂に達した時の声も聞きたい」

ひいと、私は再び悲鳴を呑み込んだ。

……な、何だか話が、話が、妙にエロい方向に行っている、ような……

「ああ、もちろん、その前に君のヴァージンを……」

「ぎゃー！ もういいです！ 分かりました、分かりましたから！」

私は叫んで、顎を固定している課長の腕をばしばし叩いた。

課長の口からヴァージンなんて言葉聞きたくない！ それが自分のヴァージンならば、なおさらだ。

らだ。

課長は私の顎から手を離しながら、にやりと笑った。

「ほら、これでもうスルーなんてできないだろう？ ペット扱いされているだけ、なんて思えないはずだ。これから君は、俺をただの上司ではなく、自分を女として欲している相手、恋人にしたがっている男として見るようになる。男として意識せずにはいられなくなるんだ」

——自分を女として欲している相手。恋人にしたがっている男。

私は何だかクラクラしてきた。できればそのまま気絶してしまいたい気分だ。

恋人いない歴〃年齢の私は、友達の話や、漫画や小説の中の恋愛しか知らない。

そんな私が手を繋ぐだけで満足とか、一緒にいるだけで幸せとか、目と目が合っただけで胸がいつぱいとか、そういう初々しくてピュアな恋を体験する間もなく、大人の階段を引つ張られて——いや、引つ張られるというよりは肩に担がれ、無理やり昇らされているのだ。ついていけないのは当然ではなからうか。

「えっと、私、私……」

いつぱいいつぱいすぎて眩暈すら覚えながら、私は必死に言葉を探した。

だけど、自分がどうしたいのかさっぱり分からない。だから、当然言葉なんて出てこない。ただただ混乱するのみだった。

とはいえ、課長に女として見られていたことに、嫌悪感は覚えなかった。だからこそ、余計に自分の気持ちに分からなくなる。



「私、私……」

私はどうしたらいいんだろうか。どうしたいんだろうか。

馬鹿みたいに『私』という単語を繰り返す私の頬を、課長がそつと撫でた。その感触に、またもやゾクツクとしてしまう。

——もう、何なのよこれ。

泣きたい気持ちでそう思った。

頬を撫でられるたびに身を震わせる私を見る課長の顔は、妙に楽しそうだった。

私の脳裏に、『S』という文字が浮かぶ。

「大丈夫。今すぐどうこうするつもりはないから。正直に言えば、君の部屋にある新品のベッドの寝心地を、試してみたいところだけど——」

それを聞いて、ビクツと肩が震えてしまったのは仕方ないと思う。うん。

その私の反応に笑みを深くしながら、課長はゆっくり立ち上がった。

「今の話、じっくり考えてくれ。考えれば考えるほど、君の心に俺の存在が刻まれるのだから、大いに悩んでくれていい」

私は目を見開いて課長を見上げた。その言い方から、何かこう……鬱屈したというか、とにかくただならぬものを感じたからだ。

そんな私を見下ろして、課長はふつと笑った。けれど、その微笑みはさっきまでのものとは違い、なじみのある優しいげなものだった。

「今日はこれで退散するでしょう。戸締まりに気を付けて。セキュリティがしっかりしているとはいえ、油断してはダメだからね。……それじゃあ、お休み」

完全に『仁科課長』に戻って忠告したあと、課長は静かに部屋を出て行った。

私の人生に、彼自身という大きな爆弾を落として——

その後も、私はしばらく廊下に座り込んでいた。ようやく立ち上がってからショックが抜けず、ぼうつとしたまま機械的に日常生活をこなした。

もちろん食事が喉を通るわけではないから、夕食は諦めた。お風呂に入って、着替えて、ぼんやりテレビを見て、いつもの時間にベッドに入って——寝ようとした。

だれど部屋の電気を消したとたん、なぜかそこで我に返ってしまった。むしろ茫然自失したままでいれば、寝不足になることもなかっただろうに。思考停止状態から抜け出すや否や、課長とのあれやこれやを思い出してしまったのだ。もちろんそれで寝れるわけがない。

シンと静まり返った真つ暗な空間に、目覚まし時計が時を刻む音だけが響いていた。

寝るのを半ば諦めてその静寂に身を浸していると、全て現実ではない気がしてきた。課長から言われたことも、されたことも、夢の中の出来事だったような——

——うん、夢だ。

私は唐突にそう思った。

もしかしたら初めての一人暮らしを不安に思うあまり、無意識の願望を夢に見たのかもしれない

い……うん、きつとそうだ。

自分にあんな願望があったなんて驚き桃の木だけど、冷静になって考えると、あの課長が私を好きだなんて、そんなことはありえない。大事なことからもう一度言おう。ありえない。

私は暗闇の中で深い息を吐き、身体のを抜いた。

明日からまた、平凡だけど平和な日々が待っている。それが私の人生だ。親戚は特別な人たちでも、私自身は普通そのもの。間違っても、猫を被った腹黒男に狙われているなんてことが、あつてはならないのだ！

そう、夢。絶対に夢。

私は自分にそう言い聞かせて目を閉じた。朝起きたら、その夢から覚めていることを願って――

\* \* \*

けれど、やっぱり夢なんかじゃなかった。

ファーストキスを奪われた上に、し、舌まで入れられたんですけど……！

課長の豹変ひょうへんぶりにすっかり意識を奪われていたけれど、人生初のキスが、いきなりアレって……アレって……うわああああ！

感触までリアルに思い出してしまい、私はベッドの上でゴロゴロと転がった。

そしてキス以上に衝撃的だったのが、課長の告白……いや、宣言だった。

好きだって言われたよね、私？

いつから、いつからそんなことになっていたんですか、課長……！

そりゃあ確かに他の人よりは構われていたし、可愛がられていたとも思う。そのことに、密かに優越感さえ感じていた。だけど、それはあくまでペットや妹を可愛がる感覚だと思っていたのだ。

だって課長だよ？ 容姿も頭脳も身分も何もかも兼ね備えたあの課長が、私なんかを恋愛対象として見るなんて思うわけがない。だって私は課長が今まで付き合ってきたタイプとは、まるで正反対なのだから。

なのに好き？ 私を好き？ ……信じられない。

だけどキスは元より、課長に色々言われたことを思い出すと……

『君の身体を開いて一つになりたいし、絶頂に達した時の声も聞きたい』

脳裏にその言葉がはつきり蘇よみがえった瞬間、顔がカアツと熱くなった。

「ぎゃー……！」

私は叫び声を上げ、再びベッドの上で身悶みだえる。

私を好きだというのはイマイチ信じられないけど、自分が狙われているのだけはバッチリ分かりましたとも！

こうして私が佐伯家所有のマンションにいるのも、彼の作為によるものだって今なら理解できる――今さらだけど！

おバカな私は課長が仕掛けた罠わなの中に、自ら飛び込んでしまったのだ。

透兄さんが「だから言わんこっちゃない」と言って呆れかえる顔が目には浮かぶ。なぜだか分からないけど、透兄さんには分かっていただと思う。課長の思惑が。……まさか同じマンションに越して来ることまでは、予想してなかっただろうけど。

透兄さんも、もつとはっきり言ってくれていたらよかったのに。それか、もつと反対するか……

そこまで考えて、私は首を振った。

ううん、透兄さんに責任転嫁するのは間違っている。だって透兄さんは佐伯家所有のマンションに住むのはやめろと言っていたし、課長に気を付けろと忠告もしてくれていた。

それを無視して、ここに住むと決めたのは私自身。つまり私は、自分で自分の首を思いつきり絞めたのだ。

今頃、課長は「してやったり」とか思っているんだろうな。

自分の迂闊さに腹が立った。誰のせいにもできない鬱屈した思いは行き場を失くし、自分に跳ね返ってくる。

……それにしても、いつから課長にそんな目で見られていたのかな。ちつとも気付かなかったんですけど？

ペット扱いされだした頃から？ だけど、あの時課長はH社の美人営業課長である岡島さんと付き合っていたはず。

岡島さんの颯爽とした姿を思い出すと、何だか胸がキュウと疼いた。だけどそれには気付かない

フリをする。岡島さんと破局したあと、課長は誰とも付き合っていない。それまで恋人がいない時期なんてほとんどなかったのに珍しいと、部署内で何度か話題になった。もしかして、あの頃から……？

いや、それは自惚れすぎだろう。だってあんなにモテる課長が、私のために美人さんたちのアプローチを断っていたとは考えにくい。

だって私は何も持っていない。課長の隣にいるのに相応しいものを、何も——

思考がネガティブになってきて、私は慌てて首を振った。これ以上は考えても苦しくなるだけだと、頭の中で声がしたのだ。私はその声に逆らわない。なぜなら、それは自分を守るための本能の声だから。

私は気分を一新しようとベッドから出て、カーテンを開けた。日の光が部屋と私を照らし出し、眩しくて一瞬目を閉じる。

窓を開けると、三月のまだ冷たい空気が入ってきて、私はぶるつと身を震わせる。でもそのおかげで眠気が覚め、頭もシャキツとした。

今日は記念すべき、一人暮らし第一日目。だけど、感慨にふけっている暇はない。貴重な休日なのだから。

私は窓を閉め、時計を見ながら今日の予定を立てる。

まずは外に出て食事をして、それから買い物をするのだ。今、この部屋には食べるものがない。

冷蔵庫はあるけど、中身は空っぽだ。というわけで、食料を買ってこねば。

そうして私は、慌ただしく身支度を始めた。そのごく日常的な行為と、窓から差し込む明るい日の光が、昨夜のことをますます現実から遠のさせる。本当に夢だったような気さえしていた。

ファンデーションと口紅という必要最低限の化粧をすると、クローゼットに向かい、中からコートとバッグを取り出した。

——その時だ。いきなり『ピンポーン』という音が、部屋に響いたのは。

コートとバッグを手にしたまま、思わず飛び上がる。ドキドキしながらインターフォンの室内機に目を向けると、それは小さな赤い光を発して来客を告げていた。

私は、ごくんと喉を鳴らす。

……と、隣の部屋の人とかだよね!? 決して、夢の中で最上階に住んでいると言っていたあの人がなくて!

そう思いながらも、まるで爆弾のスイッチを押すかのような気分でインターフォンのモニターをオンにする。そこには、コート姿で眼鏡をかけた仁科課長が映っていた。

キターーーー! と思って青ざめると同時に、ほんの少し安堵する。モニターに映っている課長はいつもと変わらない姿だったからだ。ほんのり柔和な笑みを浮かべるその顔を見て、「ああ、やっぱりあれは夢だったのかも」なんて思った。

だから『ピンポーン』ともう一度チャイムが鳴り響いた時、私はつい通話ボタンを押して応じてしまった。

「は、はい?」

……まあ、声は思いっきり裏返っちゃいましたけど。

「おはよう、上条さん」

モニター越しに、課長はおなじみの穏やかな口調で言った。ここが会社だと錯覚してしまいそうになるほど、本当にいつも通りの彼だった。

「お、おはようございます」

「昨夜はよく眠れたかい?」

私と課長が主演のとてもない夢を見たので、全然眠れませんでした! ……などと言うわけにはいかず、適当にお茶を濁す。

「え、ええと……そ、それなりに……」

「……そう、よかったね。ところで、もう朝食は食べたかな?」

「い、いえ、まだです。部屋にまだ食べる物がなくて……」

「だと思った」

課長はモニターの向こうで——いや、ドアの外でにっこりと笑う。

「俺もまだなんだ。一緒に食べにいかないかい? 近くに美味しい店があるんだ」

——羊の皮を被った狼が、笑顔でそう言いました。

昨夜のことは夢だと思い込もうとした私だが、オートロックのマンションの中に課長がいるという事実が気付いてしまった。

頭の中で警告音がガンガン鳴り、渋る私を課長は巧みに懐柔する。

「朝食——といっても、もう昼食みたいなものだけど、食べたらこの辺を案内するよ。上条さんが知っているのは、駅前の商店街だけだろう？ それ以外にも色んな店があるし、銀行や郵便局、それに何より役場の場所を知つとかなきゃね？」

——役場。その言葉に私はビクッと反応した。

そう、引越越したということは、住民票を移す必要があるということ。つまり役場に転入届を出さないといけないのだ。それに郵便物を新しい住所に転送してもらうため、郵便局にも転居届を出さなきゃならなくて……

今日は日曜で役場や郵便局は休みだから、平日に行つて手続きする必要がある。だけど平日は仕事なので早退させてもらうか、出勤を少し遅らせてもらうしかない。その場合、役場や郵便局の場所を把握しているのといないのでは、大違いなのだ。

もちろん、人に道を聞いたりネットで場所を調べたりする方法もあるけれど、実際にそこへ連れて行つてもらうのが一番早いのは確かだった。

私はモニターの中の課長をちらりと見る。

眼鏡をかけて、少し前髪を上げたそのスタイルは、やっぱり会社で見る彼と全く同じ。口調もそう。柔らかくてちよつと論ずさだような言い方から、昨夜豹変ひょうへんした時みたいな押しつけがましさは感じ

られない。

……大丈夫だよな？ だつて外に出れば人目があるし。

本能が警告音を発しているにもかかわらず、私は寝不足の頭でそう判断してしまった。

「……そうですね。お願いします」

そして元々外出するつもりでクローゼットから出しておいたコートとバッグを掴み、玄関に向かう。

玄関のドアを開けると、課長は私の顔を見てにこつと笑った。

「おはよう、上条さん」

「おはようございます、課長」

反射的にそう返した私に、課長は笑顔のまま言った。

「七十点」

「へ？」

「警戒してすぐにドアを開けなかったところは合格。だけど、ちよつとついただけで警戒を解くのはまだまだ甘いね。それも昨日の今日で、俺相手にそんなに簡単に開けてはダメだよ」

「——へ？」

「昨日、はつきり言つたはずだけどね？ 君を手に入れるつて。その俺をこうして迎え入れてくれるつてことは、俺の宣言を了承したものと解釈されてもおかしくないよ」

な、何だそれは！ 役場とか郵便局とか魅力的な単語を出してドアを開けさせたのは、そつちの

くせに！

あまりの言い草に反応するのが遅れてしまい、ドアを閉めようとした手を掴まれてしまう。ひい、と顔を引きつらせる私に、にっこり笑う課長。

「何もなかったことになどさせないと、昨日言っただろう？ さて、じゃあ、ごはんを食べに出かけるとするか」

「や、やっぱり行きません！」

「なら、部屋で食べるかい？ 宅配ピザでも取って、二人きりで過ごすのもいいね」  
「遠慮します！」

私はブンブンと首を横に振った。ベッドのある密室に二人きり？ そんな危ないこと、できるか——！

まるで首振り人形のごとく首を横に振り続ける私に、課長が笑みを深くして言った。

「外で食べるか、部屋で二人で食べるか。二つに一つだ。選ばせてあげるよ」

そうなるかと、私が取れる選択肢は一つしかなかった——

三十分後、私たちは人でにぎわうベーグルの店にいた。

「わりと最近できた店なんだ。色々な種類があって人気なんだよ」

店先には、テイクアウト用のベーグルが何種類も並べられている。店の奥には落ち着いた雰囲気喫茶店が併設されていた。

人気というだけあって、席はほとんど埋まっている。ブランチを楽しむ親子連れや、本を片手にベーグルサンドを口に運ぶ『お一人様』な女性、ノートパソコンを開いて仕事をしているサラリーマン風の男性、そして何組ものカップルたち。

……私たちも、カップルに見えるのだろうか。

私は目の前に座る、私服姿の課長にちらりと視線を向けた。さつきと違い、眼鏡はかけていない。課長の方もちょうど私を見ていたらしく、目が合ってしまった、にこつと微笑まれる。だけど私は、引きつった笑みしか返せなかった。だって。だって。

——どうして私、こんなところにいるんでしょうねえ？

という疑問で頭がいっぱいだからだ。

「詐欺だよ……」

ベーグルのツナサンドに口をつけながら、嘆く私。

「何が？」

と応じた課長は、ベーコンエッグベーグルサンドを食べていた。彼はここに来るまでの間にいつの間にか眼鏡を外し、イケメンオーラと男の色気をこれでもかとはかりに発しまくっている。

お一人様な女性はもちろん、カップルの女性までもがちらちら見ってくるものだから、落ち着かないついたらありやしない。だって必ず、連れである私も見られるんだもの。

被害妄想かも知れないけど、「何であんな子が？」って思われている気がする。

「何もかもがです」

そう答えながら、本当に何で私なんだろうと思つた。

これだけ素敵な人なのだから、どんな美女でも選び放題なはず。現に今までの恋人は、全員美人で仕事もできて、自分に自信があるタイプの女性ばかりだった。

それを思うと、私は課長の好みからかけ離れている。自信なんてないし、仕事ぶりも普通だ。従姉妹たちと違って美人でもない。この人の隣に立つのに相応しいとは、どうしても思えない。自分でもそう思うのだから、他人からはさぞ不釣り合いに見えるだろう。

……なのに、どうして？

この人に限って、人をからかうためにあんなことを言い出すとは思えない。だからこそ、戸惑つてしまうのだ。

「あの……いつからなんですか？ 私、ちつとも気付いてなくて……」

私は目の前の人をちらつと窺いながら尋ねた。「私を好きになったのはいつ？」とはつきり聞くのが恥ずかしくて曖昧な言い方をしてしまったけど、言いたいことは伝わったらしい。

課長はふつと笑つて答えた。

「けっこう前からだよ。かなり意思表示しているつもりだったけど、君には全然気付いてもらえなかった。わざと気付かないフリをしているんじゃないかと思つたりもしたよ」

あれ？ 笑顔の向こうに、黒いオーラが見えるような……？

「こっちの口説き文句は全てスルー。もしくは冗談だと思つていたよね」

課長は不意に笑みを消し、真剣な眼差しで私を射抜いた。

「ここではつきり言つておこう。俺は思わせぶりなことを冗談で言つたりはしない。本気にされるその後々面倒だからね。だから、これまで君に言ってきたことは全て本当だよ」

口説き文句……そんなのあつたっけ？

具体的にどんな台詞だったのか聞きたかったけど、それを聞いたら課長のオーラがさらに黒くなる気がして口には出せなかった。

とりあえず、けっこう前かららしいことは分かった。それつてあの、猫のmanaちゃんに似ていると言われて頭を撫でられた時からだろうか。

でも、あの時の私はまだ課長を警戒していた。だからそんな目で見られていたとしたら、気付いたと思うんだけど……

そう思つて恐る恐る尋ねたら、課長に否定された。

「いや、あの頃も確かに気にはなつていたけど、頭を撫でたのは純粹にmanaに似ていると思つたらだ」

「そうですか……」

私は、それが課長の気持ちに気付かなかつた原因の一つかもしれないと思つた。

あの時、課長は私のことを、愛玩動物か親戚の女の子みたいに扱っていた。その頃の課長からは恋愛感情とか性的関心とか、そういう色っぽいことなど一切感じ取れなかったのだ。

だからこそ徐々に警戒モードを解いていったわけだけど、逆にそのイメージに囚われて鈍感になつていたのだろう。

課長から『思わせぶりなこと』を言われても、私はそこに恋愛の意味があるなんて考えもしなかったのだ。

そして私は、そういう関係がずっと続いていくものだと思い込んでいた。

おかしいよね。人の心は変わるっていうのに。

課長がはつきり言ってくれなければ、おそらく私は今もそう思い込んでいただろう。だって——それが一番安全だったから。

……そう、安全。なぜか私はそれが安全な気がして、そこからはみ出したくなかったのだ。けれど今、その安全な場所から引つ張り出されようとしている。

「君が俺と同じ気持ちでないのは分かっているよ」

不意に課長が苦笑しながら言った。私は思っていたことを見抜かれた気がして、ギクリとする。そんな私を見て、くすつと笑う課長。

「戸惑っているのが顔に出ている。それに口説きながらずっと観察していたから、自分がどう思われているのかくらいは分かっているつもりだ。良い上司以上、恋人未満。好意はあるけど、恋愛感情ではない。そんなところだろう？」

「……はぐ」

私は俯きながら頷いた。

だけど、本当は自分が課長をどう思っているのか、よく分からない。

確かに同じ上司である田中係長とは違う。課長はもつと特別だ。それは間違いないけど、その感

情が三条家と佐伯家の関係からきているのか、それとは全く関係ないのか、判断がつかないのだ。今はとてもじゃないけど、課長に求められて嬉しいという気持ちにはなれない。むしろ、前の関係のままだったかと、そう思ってしまう。

それは課長の気持ちを否定しているも同然だけど、今の正直な気持ちだった。

本当に、どうしていいのかわからない。

「その関係性を打破しようと思っただけで働かされてきたけど、君の天然っぷりは思わず感心するほどだったよ。だけど、そこで足踏みしていたら何も変わらない。だから引越つ越しを利用して、ぐつと近づぐことにしたんだ」

課長は私を見て笑みを浮かべる。でもその笑顔は、いつもの課長とは違って見えた。そう、まるで昨夜のような……

「良い上司の顔をしたまま徐々に君の心に食い込んでいくという手もあったけど、それだと時間がかかるからね。こつちも禁欲生活が長いし、諸々の事情もあってガツンと行くことにしたんだ」

「き、禁欲？」

あれ？ 何か話がまた変な方向に……？

「その件については追々、ね。さし当たっての目標は、その『良い上司』のイメージを崩して男として認識してもらうことかな」

戸惑う私をよそに、課長はどこか楽しそうに続けた。

「良い上司の仮面を被り続けていたら、君はそのうち『やっぱり、あれは一時の気の迷いだっただけ』



『違う』なんて思い込みに逃げそうだからね。そうさせないためには、一気に恋人同士の関係になっちゃおうのが一番だけど——まだ機は熟してない。だから普通のお付き合いをしながら、俺に慣れていって欲しい」

「へ？」

「……私、お付き合いするなんて一言も言ってないですよ？ それ以前に、課長の気持ちの変化を受け入れられてないんですけど？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ、課長！」

「うん、待ってるよ。君のペースに合わせてあげる」

目の前のイケメンが、にっこりと笑う。だけどその笑みは『仁科課長』のものとは明らかに違っていた。

「俺のペースで進めるつもりなら、きっと今頃君は俺と一緒にベッドの中だよ。何しろ俺は、君に『大人の恋人同士の関係』を教えたくてたまらないんだから」

「べ、べ、ベッド!？」

「だけど、昨日君のお父さんからお手柔らかにと釘を刺されてしまったし、俺自身もけじめをつけなくてはならないことがあるから、今すぐ君をどうこうするつもりはないんだ」

「そ、そうですか……」

お手柔らかについて、そういう意味じゃないのでは!? って疑問はさておき、私はその言葉に安堵の息を漏らした。けれど安心できたのは、束の間のことだった。

「だからその間に、俺という存在に慣れて欲しい。良い上司でなく、男として見て欲しい。——これだけは言っておく。絶対になかったことにはさせない」

そう言って、課長は真つ黒い笑みを浮かべた。この、のどかで明るいベーグル屋には全くそぐわない種類の笑みを。

「なかつたことにされるくらいなら、今すぐ君をベッドに引きずっていく」

「……すみません、気絶してもいいですか？」

恋とか愛とかいうのは、もっとふわふわした可愛らしいものだと思っていた。相手の一挙一動にドキドキして、甘酸っぱい気持ちになって。「どこの少女漫画だよ」ってツツコミ入れたくなるよな。

「だけど、現実とは違っていた。」

確かに、課長の一挙一動にはドキドキする。でも違う——何か違う! このドキドキは、トキメキや胸キュンじゃない。明らかに何か別のものだと思う。

それに私のペースっていうけど、今のところ何もかもが課長のペースだ。

「——というわけで、よろしくね。まなみ」

そう、にっこり笑って宣言する彼を前に、私は引きつった笑みを浮かべるしかなかった。

——何もかもが夢だったらよかったのに。そう思いながら。

## 第2話 後悔先に立たず

翌日の月曜日。いつもより早めに会社に着いた私は、少しあとに本社してきた川西さんを、給湯室へ引っ張り込んだ。

「猫かぶりで、腹黒で、Sで、オマケに俺様だったんですー！ー！」

「ちょ、ちょ、ちょ、上条ちゃん？」

「腹黒で俺様なんて従兄弟たちだけで十分だっていうのに、加えて猫かぶりとS属性まで併せ持った人だったんですよ！」

「落ち着いて上条ちゃん。主語が抜けてるから、何のことだかさっぱり分からないんだけど？」

「もちろん、仁科課長です！」

困惑しながらも宥めるように言った川西さんに、私はきっぱりとした口調で答えた。田中係長の恋人であるこの人なら、絶対に課長の思惑を知っていると確信していたからだ。

「……課長？」

川西さんの眉がぴくりと上がる。

「住んでるの、同じマンションだったんです！」

「同じマンション？」

「はい。前に言っていたマンションではなくて、私が住んでるマンションの最上階に引っ越したって。それで——」

「上条ちゃん」

川西さんは私の言葉を遮り、両肩をがしっと掴んで笑った。だけどその笑顔はやたらと迫力があって、私は思わず続きの言葉を呑み込む。

「最初から最後まで、順番に話して？」

肩を掴まれたまま妙に優しい声で促され、私はコクコクと頷かざるを得なかった。

そうして川西さんに、引っ越しの日にみんなが帰ったあとの出来事と、昨日あったことを説明した。話が進むにつれて川西さんの目がどんどんつり上がっていくのが、正直怖い。

「あの腹黒め……！」

付き合うことが決まったところまで話すと、川西さんは吐き捨てるようにそう言った。そして「ちょっと待ってて」と言い残して、ヒールの音を高く響かせ給湯室を出て行く。やがて田中係長の耳を引っ張りながら、二人で給湯室に戻ってきた。

毎週月曜の朝一には管理職のミーティングがあるのだが、どうやら係長はミーティングを終えて部署に戻ってきていたらしい。ちなみに仁科課長と田所部長は別の部署との会議があるため、戻らずにそちらへ向かったはずだ。そのあたりのスケジュールはぼつちり把握している。何しろ秘書業務もやっていますから。

課長のスケジュールを確認した時は正直、会社で顔を合わせる時間が減ってホッとした。だっていつものようにふるまえる自信は全くなかったから。

「いててて、そんなぐいぐい引つ張るなよな。……おう、上条おはよう」

田中係長は顔を顰めながらも、私の姿を見て軽く手を上げた。目を丸くしつつも、私は律儀に応える。

「お、おはようございます。係長」

「挨拶はいいから。係長、どういうことなのか説明して！ 課長が上条ちゃんと同じマンションに引つ越したなんて、初耳なんですけど？」

係長の耳たぶを強くつねって促す川西さん。

「いてててて!!」

あれは痛いわーと思いつつ、私は目の前の二人のやり取りを見守った。

「何？ あいつ、もう行動起こしたのか？ さすが、時間を無駄にしない奴だな」

川西さんから一昨日と昨日のことをざっくり聞いた田中係長の第一声はそれだった。そんな係長のスーツの襟を掴んで、揺さぶる川西さん。

「感心している場合じゃないわよ！ 係長、課長が上条ちゃんと同じマンションに引つ越すこと、知ってたんでしょう？ 知っててあえて私に言わなかったんでしょう？」

「あー、悪い。知ってた」

「このおおお！」

「だってお前、言ったら絶対協力しないと思って」

「当然でしょう！ 私は上条ちゃんが引つ越すのが課長と同じ街でも、住むマンションは離れているからと思って協力したのよ！ 同じマンションだっていうなら、話は全く違うわよ！」

「だから言わなかったんだ」

「このおおお！」

二人のやり取りを傍観しながら、私は「やっぱり」と思った。課長が私と同じマンションに住もうと画策していたのなら、この人たちがそれに関わってないなんてありえない。

それに、ちよつとおかしいと思っただけだ。他の部屋は難癖つけて却下し続けた川西さんが、あのマンションだけは絶賛していたし。あれって、どう考えたってあのマンションに住むよう私を誘導していたよね？

そんなことを考えていたら、川西さんが係長の襟首に手を掛けたまま、私の方を振り返って言った。

「ごめんね、上条ちゃん。まさか課長がそんな計画を立ててたなんてちつとも知らなくて、手を貸しちゃったの」

「……あー、そうだと思ってました。でも、それって川西さんだけじゃないですよ？」

先輩社員の水沢さんや、同期の浅岡さんも怪しい。みんなが見つけてきた物件のほとんどが、成約済みだったしね！

「ええ、みんなで課長に協力してあげようということになって」「ちよ、何でみんなして私と課長を近づけようとするんですか！ ……って、それじゃもしかして、みんな課長が私のことを、その…狙ってるって、前から分かって…?」

私はそれに思い至って、思わず顔を引きつらせる。

「そりゃあ分かるだろう。分かってなかったのはお前だけだ」

襟を掴んでいた川西さんの手を外しながら、係長が呆れた声で言った。

「少なくともうちの部署の連中は、みんな気付いてるぞ。というか、あんなにあからさまだったのに、気付かない方がどうかしてる」

「そうそう。それで課長が気の毒になって、みんなで応援することにしたのよね」

「……」

地味にシヨックだ。みんながみんな、課長の味方についてたつてことが。課長に同情する前に、彼の気持ちを教えて欲しかったと思うのは私の我儘ですか!? ねえ!

「……いや、「気があるんじゃない?」という意見を「まさか」の一言でスルーしたのは私でしたっけね。そうか、自業自得か……」

「で、付き合うことになったのか?」

揺さぶられたせいで緩んでしまったらしいネクタイをきゅつと締め直しながら、係長が私に尋ねた。

「そのことですが……どう考えたってマズイと思いませんか?」

実は川西さんを朝から給湯室に連れて来たのは、そのことについての意見を聞きたかったからなのだ。

ほぼ強制的に付き合うことになったけど、まだ三条家と佐伯家の婚約話が白紙に戻っていない以上、許婚候補である私と課長が付き合うのは、色んな意味でマズイと思う。

今まで課長はひっきりなしに恋人を作ることで婚約話を停滞させていたようだけど、私と付き合ったら、停滞どころか加速させることになるだろう。何せ両家にとって、願ったり叶ったりの状況なのだから。

私たちが付き合っていることを、うちのお祖父ちゃんや佐伯家の美代子おばあちゃんに知られた瞬間、佐伯家と三条家にウェディングマーチが鳴り響くに違いない。

そうなれば、婚約話を白紙に戻そうと頑張っている透兄さんたちの行動に水を差すことになる。婚約話を白紙に戻すための行動は、自分たちのことは自分たちの意思で決めたい、強制されたくないという、私たち全員の意思表示でもあるのだから。

「まあな、今の段階でお前たちのこと……というより彰人の気持ちがあま代子おばあさんにバレたら、マズイ事態になるだろうな」

私の話を聞き終えた係長が言った。

「だけど彰人は今すぐお前のことを家族に話したり、三条家の面前に突き出したりはしなないと思う。今そんなことをしたら、お前に逃げられるのが分かっているからな。それに婚約話自体を白紙に戻すつもりでいるから、もう恋人がいることを盾にする必要もないだろうし」

「同じ理由で、三条課長たちがおじいさんにバラすこともないでしょうね」  
うんうんと頷きながら、川西さんが補足する。三条課長というのは、取引先である三条コーポレーションの営業企画部課長——つまり透兄さんのことだ。  
「そうですか……」

なら特に問題はないかもしれない。そう思いつつも、まだ胸の奥にもやもやしたものが残っていた。

その不快な感覚にちよつと顔を顰<sup>しか</sup>めていると、係長がこちらを探るような目で見ながら言う。

「ところでお前、本当に付き合うのか？」

それは思ってもみなかった質問だった。

「え？ ……えつと、その……ダメって言ったところで、聞く耳を持ちそうな相手じゃないですし……」

私が困惑しつつそう答えたら、係長はため息をつく。

「お前ね、簡単に流されるなよ。そんなんじや、彰人にいようにされるだけだぞ？」

「あら、係長は上条ちゃんと課長をくつつけたいのかと思ってたわ」

目を丸くして、意外そうに川西さんが言った。すると、係長は肩を竦<sup>すく</sup>める。

「お膳立てはしてやったけど、そこまでだ。……とは言っても、こいつ相手だと、あいつの一人勝ちが続く気がしてならないんだが」

係長が私を指差して言うと、川西さんが頷く。

「しよっぱなから、完全に押されてるものね。あのね、上条ちゃん。嫌なら無理やり付き合うことはないのよ。嫌がつているのに課長が聞く耳を持たないって言うなら、私が殴<sup>なぐ</sup>ってでも止めてあげるから」

「いえ、嫌<sup>きら</sup>ってわけでもないんです。だからこそ困<sup>こま</sup>ってるんです」

私は苦笑しながら首を振った。

そう。本当に嫌で逃<sup>にげ</sup>りたいなら、恥をしのんで透兄さんたちに泣きつけばいい。「だから言わんこつちやない」って怒られるだろうけど、透兄さんたちなら絶対に助けてくれる。それは確信していた。

……だけど困惑はしているものの、嫌で嫌で仕方ないとは思っていない。とはいえ、付き合い合いかというところでもなくて……

「ふむ……」

係長は顎<sup>あご</sup>に手を当てて、私に再び問いかけてきた。

「じゃあ、質問を変えよう。お前はどうしたいと思ってるんだ？」

私はしばし考えてから、おずおずと答える。

「今日会社に来るまでは、なかったことにしたいと思ってました。今までのような関係がいい、上司と部下でいたいって。課長の気持ちを見無視するみたいで悪<sup>わる</sup>いんですけど、そう願<sup>ねが</sup>っていたんです。でも……」

会社に来て、主<sup>あるじ</sup>のいない課長の席をぼんやり見ていたら、不意に胸が苦しくなった。もし付き合い

えないと言ったら、もう構ってもらえなくなるかもしれないと思ったからだ。

頭を撫でられたり、目が合うと微笑みかけられたりしなくなるんだと思ったら——嫌だっと思ってしまった。

恋愛感情を向けられて戸惑っているくせに、特別扱いしてもらいたいとも思っている。すごく矛盾しているのは、自覚しているけれど。

私が課長を好きだからなのか。それともただの独占欲なのか。……さっぱり分からないものの、この特別な関係を失くしたくないのは確かだった。

『佐伯彰人さん』に対してこんな感情を持つのはダメだって分かっていたのに、いつの間にか、私の気持ちは変化していたんです。でも、これが恋愛感情なのかは分からない。だって最初からあの人は、私にとって特別な存在だったから。私は彼の許婚候補の一人だってことを、いつだって意識していました。それが高じて、こんな感情を持つようになったのかもしれないじゃないですか」

もし佐伯家とか三条家とか関係なく出会えていたら、こんな感情を抱いただろうか？

「ねえ、それを確かめるために付き合ってみても、いいんじゃないかしら」

川西さんが苦笑しながらも、優しく言った。

「付き合っていくうちに、その答えが見つかるかもよ？ そうね、上条ちゃんがそれを見極めるまでなら、課長をどやしつけるのは保留にしておいてあげてもいいわ」

と、何やら物騒な言い方をした川西さん。係長も苦笑して「無自覚かよ……性質悪いな」とぼそぼそつぶやいてから言う。

「まあ、お前と彰人の間には、三条家と佐伯家の問題がいつも立ちはだかっているからな。お前がそれを通してしかあいつのことを見られないのは仕方ないと思う。反対に彰人はお前が三条家の人間だと気付いてないから、余計なことに囚われずにお前を見られるわけなんだが……」

そこまで言うと、係長は不意に真顔になった。

「なあ、上条。これは三条とか佐伯とかに囚われず彰人を知るチャンスなんじゃないか？ それにお前が気にしている両家の問題は、もうすぐ解決するはずだ。全てが白紙に戻れば、お前ももう少し違った見方ができるようになるかもしれない。早急に答えを出す必要はないんだ。そんなのは、あいつも望んでないだろうさ」

——その言葉は、やけに長く私の中に残った。

部署に戻って仕事をしながら、私はちよつとだけ胸のつかえが取れた気がしていた。今なら課長と顔を合わせても平気だ。

おかしいよね、だって今朝までは課長と顔を合わせるのをあれだけ怖がっていたのに。失くすのが嫌だと自覚したとたんに何かが変わってしまったみたい。

川西さんや係長から言われたように、この感情の正体を見極めるためにも、一步踏み出してみようかな……？

そんな風に思ってきたのだ。

もしかしたら、私は誰かに背中を押してもらいたかったのかもしれない——

午前中の仕事である議事録の作成を終えた私は一息入れようと、携帯マグカップを片手に部署を出た。そして給湯室に向かっていたら、ちょうど会議から戻ってきたらしい課長とエレベーターの前でばったり出くわしてしまった。

ぎくりとして、思わず足が止まる。

課長は私の前までやってくると、昨日の腹黒男と本当に同一人物かと疑うほど、穏やかに微笑んで言った。

「おはよう、上条さん。いや、おはようっていつでももう昼近いけどね」

「お、おはようございます。課長」

答えながらも、カアツと顔が熱くなった。

目の前にいるのは、よく見知っている『仁科課長』だ。だけど、私はもうこの人の別の顔を知っているし、相手が自分をどう思っているのかも知っている。それでも猫を被ってられる課長とは違って、私は何もなかったように平然とふるまうことなどできない。

「か、会議、お疲れ様です。ふ、部長は？」

普通に！ そう自分に言い聞かせながらも、ぎこちない口調になってしまう。

「部長はまだ会議室だ。会議自体は終わったけど、人事部の部長と立ち話をしていたから、一足先に戻ることにしたんだ」

課長は答えながら、真っ赤になった私の顔を見下ろし、くすつと笑った。……今の笑いは『仁科

課長』より、昨日の腹黒男に近かった気がする。

「そ、そうですね」

思わず腰が引けてしまったけど、逃げ出したいという気持ちにはならなかった。

『これは三条とか佐伯とかに囚われず彰人を知るチャンスなんじゃないか？』

『それを確かめるために付き合ってみても、いいんじゃないかしら』

係長と川西さんの言葉が不意に蘇った。

なんとなく誘導されている気がしなくてもないけど、ここで逃げたら私はきつと後悔すると思う。失くしたくないと思うのなら、自分から掴まないと。

自分がこの人に相応しいなんて全然思えないし、彼の今までの女性遍歴を考えると、すぐく不安になる。三条家や佐伯家のことも、もちろん気になってしまう。だけど何もしなかったことを後悔するより、やって後悔する方がいい。

……だから、一歩前に出てみようかな？

「あ、あの、課長？」

私は文字通り一歩前に出て、それからハツとして周囲を窺った。だが幸い廊下には私たち以外に誰もおらず、近くの部屋から人が出てくる気配もない。

「どうしたの、上条さん？」

課長は「おや？」というように眉を上げながらも、いつもの柔和な笑みを浮かべている。演技なのかかもしれないけど、私はその笑顔に後押しされて言った。

「あの、お付き合いの件なんですけど……その、とりあえずよろしくお願いします」  
私はペコリと頭を下げる。

強要されて付き合ってたって形にはしたくなかったから、承知して付き合うって形にした。……これでもいいんだよね？

私は自分にそう問いかけながら、頭を上げて課長の反応を窺う。

課長は目を見開いていた。まさか私が自分からそんなことを言い出すとは、夢にも思っていないかっただろう。

ここ数日間、振り回され続けたけれど、これで少し溜飲りゅういんが下がったような気がした。

課長が不意にふわりと笑う。

「ありがとう、まなみ」

それはいつもの仁科課長スマイルでも、一昨日と昨日見せた黒い笑顔でもない、本当の笑顔だった。

つい引き込まれそうになり、恥ずかしくなって目を伏せる。課長が動く気配がしたと思ったら、触れそうなくらい近くから、熱っぽい声が降ってきた。

「大切にするよ。もちろん、まだ君が俺と同じ気持ちでないのは分かっている。だから一步一步、君のペースで進んでいこう。無理強いはしないと……確約はできないけど、努力するよ」

……ん？ 普通ここは「無理強いはしない」ってきっぱりと言うところじゃ？

私が思わず目を上げると、課長は屈かがんで私の耳に口を寄せた。

「……大丈夫。君が早く俺を受け入れられるように、慣らしていつてあげるから。何も知らない君に一つ一つ教えていくのは、きつと楽しいだろうね」

そう告げて、頭を上げた課長の顔に浮かんでいたもの。それはもちろん、仁科課長スマイルでも、さっきの嬉しそうな笑みでもなく——ここ数日の間に何度も見せられた、あの妙に色気のある黒い黒い笑みだった。

「こちらこそよろしくね、まなみ？」

あれ、早まった……かな？

——私がさっそく後悔したのは、言うまでもない。

### 第3話 恋人付き合いのレッスン

課長と付き合い始めて、一ヶ月が経過した。

三月と四月は年度の変わり目なので仕事が忙しかったのに加えて、私生活でも色々あり、怒涛どとうの一ヶ月だった。

まず仕事の面では、秘書業務が新人研修の準備で鬼のように忙しくなった。私の本来の業務である企業調査に全く手を付けられないほどだ。



研修準備は去年も一度経験したから勝手は分かっていたのに、勤務時間内にはとても終わらず、残業の日々が続いている。

もつとも私なんかより、課長の方がずっと残業しているけれど。今年も新事業の立ち上げが何件も同時進行していて、その全てに関わっている課長はものすごく忙しい。

だから平日はお互い残業続きで帰ったら寝るだけだし、両親との約束で週末は実家に帰省しなければならぬ私が課長と会える日といったら——土日のどちらか一日だけ。

この一ヶ月間は土曜日に二人でデートに出かけて、夜になったら実家に帰るため、沿線の駅まで車で送ってもらうというパターンが続いている。

最初は実家まで直接送ると言われたものの、遠いからという理由で断った。本当は、お母さんと顔を合わせたりしたら困るからなんだけど。お母さんは婚約話に関しては中立派だが、今はまだ彼と付き合っていることを知られたくなかった。

とにかくそんな訳で、同じマンションに住んでいるのに部屋でまったり過ごす時間はない。それ以前に、部屋で二人きりなんて状況には陥らないように気を付けている。

課長が前に言っていた『俺を受け入れられるように、慣らしていつてあげるから』なんていう機会はあまりない……はずだった。

「ふっ……んっ……んんっ、んんっ！」

く、苦しい。息ができない！

私はギブギブとばかりに、課長の腕をバシバシ叩いた。

それではやくやく私が酸欠になりかかっているのに気付いたらしく、私に覆いかぶさっていた課長が顔を上げる。くちゅんと粘着質な水音を立てて、舌が、そして唇が、私の口から離れていった。

助手席のシートに背中を預け、ぜいぜいと息をつく私に、課長はくすりと笑って言う。

「キスの時は、鼻で息をするんだよ」

「そ、そんなことしたら、課長に鼻息がかかるじゃないですか！」

口から吐く息もかけたくないけど、鼻息なんてなおさらかけたくない乙女、心を理解して欲しい！ だけど課長はそんな乙女心など意にも介さず、実に楽しそうに笑った。

「そんなの気にすることないのに。それよりも、また『課長』って言ったよ。だから、もう一度最初から」

「え、ええええ!!」

という抗議の声は、再び覆いかぶさってきた課長の口の中に消えた。

『一步一步、君のペースで進んでいこう』

確か、そう言っただけ……?」

口内に侵入してくる舌に自分の舌を絡め取られ、吸われながら、この一ヶ月の間に何度も頭に浮かんだ疑問がまたもや浮上した。

事の起こりは付き合い始めてすぐ、課長がこう言ったことだった。

「これから会社以外の場所では、俺のことを名前で呼ぶように」  
「へ？」

「付き合っているのに、いつまでも課長呼ばわりはおかしいだろう？ 課長は役職であって、俺の名前じゃない。だから今後は彰人って呼んでね」

「あ、彰人……さん？」

私が戸惑いながらもそう呼んでみると、課長はにつこり笑って頷いた。

「そう、それでいい。もし課長って呼んだら、ペナルティだ……そうだね、三回間違えることに、キスさせてもらうことにしようか」

「へ？」

「いい案だろう？ そうすれば君は否応なく名前で呼ぶようになるだろうし、間違えたら間違えたでキスできるしね。ああ、もちろんキスしてもらいたいなら、いくらでも間違えていいんだよ？」

「が、頑張って名前で呼ばせていただきます！」

——って、言ったのに！ 意識しないと、つい『課長』って口にしてしまうのですよ！

「はい、これで本日三回目の言い間違い。お仕置きだよ、まなみ？」

「わ、わ、ちょよ、ちょっと……ん、んんっ！」

そしてブチューつとされる。

私の頭の中に『彰人さん』はなかなか浸透せず、とっさに呼びかける時や無意識の時、どうしても『課長』と言ってしまうのだ。

そして課長——いや、彰人さんは、それを律儀にカウントしている。

おかげで土曜日の夜、駅まで車で送ってもらったあとは、いつもキスタイムになる。三回目と言いつつ間違えた時、必ずしも二人きりというわけじゃないから、一日分の清算とばかりに、ライトを消した車の中でキスされるのだ。

……いえね、これが唇と唇が触れ合うくらいの軽いものだったらいんですよ。それなら私も覚悟を決めて目を閉じ、唇を差し出すくらいはするかもしれない。

だけど、彰人さんがそんな軽いキスで許してくれるはずもなく、毎回思いつきり濃厚な——いわゆるデーブキスだから困る。

「んん……んんっ……」

息継ぎができないだけじゃない。口の中を舌で撫で回され、唾液どころか吐息すらも啜<sup>すず</sup>られて——そんな深く貪<sup>もが</sup>るようなキスに、酔ってしまうことが大問題だった。

頭がボーっとしてきて、力が抜けてくる。なのに、舌を吸われるたび背中がゾクゾクして、お腹の奥がキュンと疼<sup>うず</sup>くのはどうして？

もう、手足も腰もふにやふにやだ。

これでまた生まれたての小鹿のように、ふるふるしながら電車に乗る羽目になるんだ。

ねえ、これが私のペース？ ……絶対に違うと思うんだけど。